

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 6 日現在

機関番号：32665

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2015

課題番号：24720134

研究課題名(和文)南太平洋英語文学の変遷：19世紀半ばから現代まで

研究課題名(英文)The Changes of Pacific Literature in English: from the 19th Century to the Contemporary Period

研究代表者

乙黒 麻記子(OTOGURO, Makiko)

日本大学・理工学部・助教

研究者番号：60551249

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、19世紀前半から現代にかけて南太平洋島嶼部を舞台に書かれた英語文学作品(いわゆる南海物)の中から、特にR. M. バランタイン、R. L. スティーヴンソン、サマセット・モームなどの作品を比較・分析し、それらが一連の影響関係にある文学的系譜を形成していることを明らかにした。具体的には、(i)バランタインの初期から晩年にかけての三作品を比較する研究、(ii)スティーヴンソンとバランタインの影響関係を論じた研究、(iii)モーム作品に見られる楽園幻想の消滅を論じた研究、などを行った。

研究成果の概要(英文)：This research primarily focuses on literary works written in English situated in the South Pacific islands from the 19th century to the contemporary period, with special reference to (works of) R. M. Ballantyne, R. L. Stevenson and W. Somerset Maugham. The comparison and analysis of their works reveal the literary genealogy of the South Sea tales by those writers. More specifically, the research conducted in this project is three-fold: (i) the comparative study of three representative works of Ballantyne from earlier to later years; (ii) the analysis of the influence of Ballantyne on Stevenson's later works; and (iii) the study about the disillusionment associated with "South Sea Paradise" in Maugham's works.

研究分野：英文学

キーワード：南太平洋 R. L. Stevenson Somerset Maugham R. M. Ballantyne 南海物

1. 研究開始当初の背景

本報告書は、平成 24～27 年度にかけて「南太平洋英語文学の変遷：19 世紀半ばから現代まで」のタイトルで行った研究についてまとめるものである。当初の予定では、研究期間は平成 24～26 年度であったが、平成 25 年に産育休を約 4 ヶ月取得したことに伴い、1 年間の期間延長を行ったため、終了は平成 27 年度末となった。

本研究の開始以前は、サマセット・モーム (1874-1965) や R. L. スティーヴンソン (1850-1894) などを中心に、日本でも比較的メジャーなイギリス人作家についてポストコロニアル的な視点から研究を行っており、これらの作家の「南海物 (南の島を舞台とするエキゾチックな物語群の総称)」についても、それぞれに独立した研究を行っていた。

そうした中で、先行研究の多くが、個別の作家論に貢献するものではあっても、相互の影響関係について論じるものは少ないことに疑問を持つようになり、個々の作家・作品をゆるやかに包括するような視点や理論の構築を模索し始めるようになった。近年では、Michelle Keown の *Pacific Islands Writing* (2007) や、日本語で書かれたものであれば中村和恵氏の「南太平洋の現代文学」などの優れた研究もいくつかあるが、それでもなお、アフリカ、インド、カリブ海といった地域の文学に比べて南太平洋の文学は比較的マイナーなため、色々と手探りで研究を行うこととなった。

とはいえ、これは、この地域の文学が存在しないという意味ではない。むしろ、南太平洋という広大な地域に、ニュージーランド、オーストラリア、ハワイ、フィジー、サモアなど複数の文学的中心があり、またそれぞれに歴史的・文化的背景が異なるために、一つの単位として扱われていないだけかもしれない。一方で、“Pacific Way”の御旗の元、「太平洋」という共通項でもって、緩やかに連帯しようとする流れもあることは、SPACLALS (South Pacific Association for Commonwealth Literature and Language Studies) のような学会や、「オセアニア」や「南太平洋」を冠した種々の文学作品選集などを見ても明らかである。また、近年では、自費出版からスタートして、ブログや SNS を通じて地域を超えて人気を広まったサモア人女性作家ラニ・ウェント・ヤングのような興味深い例もある。

こうして、伝統的な英文学、または現代の現地作家による文学という区分を超えて、「南太平洋島嶼部を舞台に書かれた、英語文学」という視座から、通史的に研究をしたいと思うようになった。

2. 研究の目的

研究の目的 (目標) は、第一に、個々の作家が書いた南太平洋島嶼部を舞台とする作品群の影響関係を明らかにすることであった。例えば、スティーヴンソンやモームのよ

うな、従来の英文学研究において少し本流から外れたところにある作家の、さらに主要作品とはみなされてこなかった「植民地口マンズ群」の中から南太平洋を舞台にした作品を拾い上げ、個別の作品論を展開していった。その中で、スティーヴンソンやモームなどが、キャプテン・クックなどが活躍した大航海時代にまでさかのぼる南太平洋の「楽園表象」の伝統をいかに反復、ないしは批判的に変容させているかを考察した。

より具体的に言うと、(a) 19 世紀半ばのスコットランド人作家 R. M. バランタイン (1825 - 1894) と 19 世紀後半のスティーヴンソンの影響関係、(b) スティーヴンソンと 20 世紀前半のモームの影響関係、そして (c) こうしたイギリス人作家らと 20 世紀半ば以降の現地人作家ら (特にアルバート・ウェント (1939 -) やシア・フィギエル (1967 -) といったサモア人作家) らの影響関係を考察しようとした (ただし、(c) については時間的な問題で、実質的な研究成果は出ていない)。なお、これらの作家たちが残した作品の特質上、本研究ではサモアを舞台とする作品を扱ったものが多くなっている。

3. 研究の方法

(1) 研究の第一段階として、南海物の下敷きとなった 18 世紀後半から 19 世紀前半にかけての宣教師らの宗教的パンフレットや紀行文などの資料を収集した。次に、そうした一次資料を基に、(実際に現地に行くことなく、想像力のみで) 本国で量産された少年向け冒険小説も多く読み込んだ。中でも、19 世紀半ばに多くの青少年に支持を得ていた *Boys Own Paper* などの雑誌や、「ペニー・ドレッドフル」と呼ばれた三文小説に関する資料を多数収集した。こうした資料からは、イギリス本国の大衆が望む「南海の楽園」としての南太平洋島嶼部と、「野蛮」と「高貴」の両方で描かれる現地人、「野蛮を切り開く使徒」としての白人宣教師像など、後の文学作品で反復される各種ステレオタイプを確認した。

(2) 第二段階として、当時の少年向け冒険小説の大家であるスコットランド人作家 R. M. バランタインの代表作を多数読みこんだ。他にも、フレデリック・マリアット (1792 - 1848)、ヘンリー・ライダー・ハガード (1856 - 1925) など、冒険小説の古典とされているものをなるべく広く収集・読むよう努めた。なお、(1)・(2)に関する資料収集のために、平成 24 年には大英図書館やロンドン大学附属図書館などに出張を行った。

(3) 第三段階として、スティーヴンソンの南海物や、サモアで書かれた晩年のエッセイ集の分析に着手した。(3)に至る前にわざわざ上記の(1)～(2)のステップを経たのは、実際に南太平洋島嶼部を旅したスティーヴンソンの作品が、特に(2)の冒険小説群などに現れるス

テレオタイプ化された南海像を非批判的に書きなおし、より「現実的な」南太平洋像を描いていることを標榜しているからである。次に、モームの南海物を再読し、スティーヴンソンをはじめとする先行作家らとのつながりや、作中に込められた当時の社会情勢への批判などを読み解いた。

(4) 最終段階として、現代南太平洋の作家の作品を読み込み、彼らが(1)~(3)に見られたような、西洋によって押し付けられてきた「南海の楽園」というイメージをどのように「書き返し」、また自分たち独自の文学を作り上げようとしているかを考察した。そのため、平成 26 年度のハワイ大学、27 年度のサモア出張などで資料収集を行った。特に、サモアでは図書館での文献収集こそ実りは少なかったものの、現地の人々と実際に話をし、作品の舞台となってきた場所をめぐることで、より作品についての理解を深めることができた。また、アルバート・ウェントや前述のラニ・ウェント・ヤングをはじめ、現地の人々の間では今、実際にどういった作家が支持を得ているのか、そして今なお彼らの多くがスティーヴンソンに対して畏敬の念を抱く様子などを知ることができた。

4. 研究成果

(1) 最初の研究成果は、平成 24 年 7 月に発行された論文「R. M. Ballantyne の三部作における“womanliness”」である(雑誌論文。ベースとなる研究発表などはない書下ろしのもの)。ここでは、バランタインの初期から晩年にかけての 3 つの冒険小説(*The Coral Island* (1858、以下 *CI*)、*The Gorilla Hunters* (1861、以下 *GH*)、*The Island Queen* (1885、以下 *IQ*))を、どれも三人の若者らが主人公の冒険ものであることから「三部作」と仮定し(実際に、初めの 2 つは登場人物が同じ)、少年向け冒険小説の元祖としてステレオタイプ化されがちなバランタイン作品のさらなる解釈の可能性を探った。

CI と *GH* の語り手ラルフ・ローバーは、「野蛮」と「文明」の狭間で「揺れ動く」不安定な主体である。一方で、中期ヴィクトリア朝期にはヒーローの必須条件であった美德“womanliness”を保持しており、彼の仲間であるジャックとピーターキンらの行き過ぎた男性性(野蛮)を抑止する役割を持つ。そしてこれらラルフの二面性のうち“womanliness”の美德のみを前景化させたのが *IQ* のポーリナであると考えられる。ラルフからポーリナへの変容の陰には、グラッドストーン支持者であった作者バランタインの政治的な態度も関係すると考えられる。つまり、バランタインは愛国的な冒険小説を多く書いてはいるものの、特に晩年においては、帝国の無秩序な拡大には反対しており、好戦的“masculinity”を“womanliness”で手懐け、「女王」への忠誠と信仰を柱に、本国と植民地が

団結することを説いている、と結論した。

(2) 次の研究成果は、平成 24 年 12 月の「*The Coral Island* と *The Ebb-Tide* に見る南海物の形成と変容」のタイトルで行った研究発表である(学会発表)。スティーヴンソンの *The Ebb-Tide* (1894、以下 *ET*) はバランタインの *CI* の影響を受けているとしばしば指摘され、どちらも 3 少年(*ET* では中年)を主人公とし、南海の島で原住民や海賊を相手に冒険を繰り広げ、最終的に宣教師(的な人物)に救済される(もしくは救済を拒絶する)というプロットが共通する。ここでは、*ET* が *CI* の悲観的・リアリズムの書き直しであるという主な先行研究には基本的に同意しつつも、(a) 地理的・精神的・道徳的に揺れ動く *CI* の主人公ラルフ・ローバーと *ET* の主人公ロバート・ヘリックの共通点を指摘し、(b) さらにラルフがスティーヴンソンの *Treasure Island* (1883)の主人公ジム・ホーキンスのように、海賊(野蛮)的な要素を持つことを指摘、(c) 自己(西洋)の内側に潜む野蛮への恐怖や自己懐疑など、リアリズム(ひいてはモダニズム)的な萌芽は、すでに *CI* に見受けられるということを示した。

(3) 次の研究成果は、平成 25 年 5 月の「*Somerset Maugham* の“*Rain*”における「移動」する女たち」という研究発表で(学会発表)、モームの代表的な中編小説“*Rain*”(1921)を分析し、しばしば現実の南太平洋を描いていないと批判されるモームの再評価を試みた。まず、従来の典型的な南海物では、圧倒的な権力を持つ白人宣教師が登場するのだが、“*Rain*”のアメリカ人宣教師デービッドソンは、ヒロインのアメリカ人娼婦サディー・トンプソンに性欲を抱く自分を許すことが出来ず、物語の結末で自殺する。また、この作品ではサディーを筆頭に、デービッドソンの妻など 3 人の白人女性が登場する。これは、従来の南海物では女性は原住民しか登場しないのに対して、“*Rain*”では汽船の定期便の登場により、白人女性は妻・女性宣教師・娼婦などとなって本国と南太平洋の島々やオーストラリア、アメリカ大陸の間を自由に行き来する。つまり、白人男性の特権であった、帆船による冒険というリスクと引き換えの「移動の自由」は、汽船の登場に伴い女性も享受可能となっており、白人男性だけの、西洋社会では抑圧された全ての願望を満たしてくれる空間としての「南海の楽園」が消滅しているのである。

また、この作品は、当時のカリフォルニア州やハワイでの赤線廃止を背景にしている点も指摘した。デービッドソンに「社会の病巣」と糾弾され、カリフォルニアに送還されそうになるサディーは、白人男性の欲望(病)と、ひいては西洋による南海幻想の本質(白人男性の欲望の充足)をも浮かび上がらせる。このように、南海物における白人男性宣教師

を頂点とした楽園幻想は、モームにおいて、白人女性の進出とともに破綻していることを明らかにした。

(4) 次の研究成果は、平成 28 年 4 月に発行された論文「R. L. Stevenson の“Something in It”における曖昧な結末について」である(雑誌論文、投稿は前年度)。ここでは、主にスティーヴンソンの晩年の寓話“Something in It”(1896)などの分析を行い、スティーヴンソンによる植民地主義批判を考察した。

この作品には“something”や“it”といった指示内容不明瞭な語が散見され、物語の結末や、その後にある道徳詩も、複数の解釈が可能である。窮地に追い込まれた宣教師が、禁酒主義者であることを理由に屁理屈を並べ立てて異教の神々を困惑させ、命が助かる様子は、一見するとユーモラスに思われるが、重要な問題が潜む。

まず、彼が信じるキリスト教側の恩寵が現れず、異教の神々(もしくは悪魔)のみが登場するこの物語では、彼のこれまでの信仰や信じる教義が否定される。また、彼が禁酒を誓約する対象は神ではなく、同じ西洋社会に属する人間で、他者(同胞)との繋がりが彼のアイデンティティの崩壊を食い止める最後の支えとなっている。これは、不可知論者であるスティーヴンソンの立場をも反映している。宣教師が布教を行う際、世界を正誤、文明と野蛮などの二項対立で捉えるその根拠(正義)は、何らかの「力(軍事力・経済力など)」を背景とする。つまり、「他者(異文化)」側の「力」が優位になると、その支配関係は転覆されうるのである。宣教師の頓智(論点ずらし)の正体は、そうした二項対立的発想を修正し、いわば二項併置の関係に置き換えることで、「他者」による支配構造転覆の可能性を防ぐものなのである。

以上が本研究の期間中に形となった成果であるが、出産に伴う体調不良などで、研究が2年ほど大幅に停滞したこともあり、当初の計画の三分の二程度の成果となっている。特に、現代作家については、基礎研究を行ったのみで、発表や論文の形にすることができなかった。今後は、上記(2)・(3)の口頭発表2つを論文の形に仕上げるとともに、資料収集と作品精読のみで終わっているサモア人現代作家らについて、研究を進めていく予定である。

<引用文献>

Michelle Keown, *Pacific Islands Writing: The Postcolonial Literatures of Aotearoa/New Zealand and Oceania*. Oxford: Oxford UP, 2007.

中村 和恵、「南太平洋の現代文学」、『オセアニア・ポストコロニアル』春日 直樹編(国際書院、2002年)37-78頁。

5. 主な発表論文等

(雑誌論文)(計2件)

乙黒 麻記子、R. L. Stevenson の“Something in It”における曖昧な結末について、日本大学理工学部一般教育教室彙報、査読あり、100号、2016年、19-28

乙黒 麻記子、R. M. Ballantyne の三部作における“womanliness”: *The Coral Island, The Gorilla Hunters, The Island Queen* 再考、日本大学理工学部一般教育教室彙報、査読あり、92号、2012年、13-23

(学会発表)(計2件)

乙黒 麻記子、Somerset Maugham の“Rain”における「移動」する女たち、日本英文学会第85回大会、2013年5月26日、於東北大学川内キャンパス、(宮城県仙台市)

乙黒 麻記子、*The Coral Island* と *The Ebb-Tide* に見る南海物の形成と変容、日本英文学会関西支部第7回大会、2012年12月22日、於京都大学吉田キャンパス、(京都府左京区)

6. 研究組織

(1)研究代表者

乙黒 麻記子(OTOGURO, Makiko)

日本大学・理工学部・助教

研究者番号: 60551249